

## 品川区子ども読書活動推進計画 有識者等ヒアリング中間報告

### 1. 目的と対象

#### (1)目的

- 新しい子ども読書活動推進計画において重視する中高生の読書活動、ならびにそれに関連する電子メディアの利活用について、計画における認識や取組につながる知見を得る。

#### (2)対象

- 有山裕美子氏(工学院大学附属中学校・高等学校 学校司書)
- 鈴木佳苗氏(筑波大学図書館情報メディア系 准教授)
- 野末俊比古氏(青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授／同大学図書館長・アカデミックライティングセンター長)
- 三鷹市立図書館職員(予定)
- 学校図書館関係者(予定)

### 2. ヒアリング結果

#### (1)中高生の読書について

【所見】 中高生の読書を振興する上では、読書に対する考え方を広げる必要があるという認識が共通して持たれていた。また、多メディアに展開していくべきだという意見が聞かれた。「読書能力」という言葉も使われていたように、適切なメディアを利用して知識を得られるようになることが望まれていると考える。

#### 読書を広げる必要性

- 読書の目的によって範囲を再考してもよいのではないか。本に親しむ、文学を読むことだけが読書のすべてではない。たとえば調べ物をするプロセスでの読書もあるように、読書はもっと広い活動である。映像でも、音声でも、何らかの情報を読み解く活動も含まれる可能性があるのではないか。
- メディアが多様化しているなかにあつて、必ずしも本でなくてもよいと思う。知りたい情報を得るために本も含めたメディアを適切に使い、何かを知る喜びを感じる事が大切である。
- いまはSNSもあればメールもある。そのなかで子どもたちは話し言葉も書き言葉も様々なレベルを使い分けられており、言葉が多層化している状況である。
- そのような言葉の環境のなかで、従来の読書活動が捉えてきた読書の対象は狭いと思う。いろいろな「読書」があり、それを学ぶ必要があると考える。

#### 知るための能力を育むための読書活動

- 中高生にとって読書は、読み物を楽しむことだけではない。読み物を楽しむ読書は目的としての読書であるが、中高生にとっての読書は手段である。有効なメディアを選択して、自分の知りたいことを知るということが中高生にとっての読書である。
- 読書興味とともに、読解力から始まる読書能力をバランスよく育んでいくことが、中高生にとっての読書活動だと考える。

## (2)読書能力について

【所見】「読書能力」については、一律に定義されるものではなく、生活や仕事の場面に適したスキルがあるという認識が示された。

○読書習慣と言われるが、それを包含する読書能力に着目すべきなのではないか。読書能力とは、「必要なときに必要なものを読める」ということだ。つまり、生活する上で必要な「読書」ができることが望まれる。

註)たとえば法律に関わる仕事をしている人にとって必要な読む力と、教職において必要な読む力は異なる。家庭生活を送る上での読む力も異なる。生活する上で読む文書が異なることが前提となった考え方である。

## (3)読書活動ないしは読書教育について

【所見】「読書能力」を育む上では、多様なメディアに接して自分なりに情報を取捨選択することが望まれるという認識が共通して持たれていた。そのなかで、それぞれのメディアの有用性を理解しながら、本についても「役に立つ」という認識が持たれるとよいという意見があった。そのためには取捨選択のプロセスについて評価し、何が適切な選択なのかを学ぶ必要があることが指摘された。

### 読書の有用性への気づき

- 中高生が本を読むにあたっては、子どもたちが読書をどう思っているのかを把握するべきではないか。つまり、読書の意義に対する認識である。
- 読書の意義は、子ども読書活動推進計画の下では楽しむことにあることが多いが、「役立つ」ということも重視するべきではないか。この読書が「役立つ」ということを実感できるきっかけを学校教育でつくる必要がある。
- 本が「役立つ」という実感を得ることが大切である。そのような実感があれば、何かを調べるときにインターネットだけに頼らず、本も参照するようになるだろう。

### メディアを利用する経験の必要性

- リーディングスキルテスト(RST)で測られる読解力と文学を読む読解力のあいだに、様々な読書能力が存在する。個々人において得手不得手があるが、大学に入るまでぐらいに体験として行い、自分の得手不得手を把握しておけるとよいと考える。
- その体験を中高生の読書活動で行うということになるが、その際には各人が情報を理解する上でどのメディアが適しているのかも考慮した方がよい。文章だけでなく、音声、映像、話し合いなど、様々な様態があり得るので、各人が最も理解できる方法を把握できるようにした方がよい。

### 必要な環境

- 知りたい情報を得るために本も含めたメディアを適切に使い、何かを知る喜びを感じるためには、学校図書館では様々なメディアで情報を得る準備をしておき、生徒が取捨選択できるようにしておくことが必要だと考える。
- インターネット上の情報は正確ではないと言われているが、子どもたちは見抜いているのではないか。インターネット上に不確かなサイトがあるのと同じく、本のなかにも不確かなものはないか。
- 現状を踏まえると、メディアと情報の両面で必要なものを過不足なくそろえた選択肢の多い環境を

準備することが大切だと考える。情報の消費方法(メディアの選択)は多様であり、それらを価値づけることはできない。メディアにまとわされず、「本」を広げ、「読書」を広げることが大切だと考える。

### **調べ学習の展開**

- 有効なメディアを選択できるようになるためには、生徒が考える余地を残しながらノウハウやパターンを例示することで、選択を促すことが必要である。そうすれば、生徒もやり方が徐々に分ってくる。ただし、現在の学校において、そのような指導をする人が少ないという現実がある。
- そのときに公共図書館がノウハウを伝える研修を行うことは有効だろう。教員や図書館員のスキルや知識を磨くことが大事。
- 新しいことや特別なことをやろうとすると労力がかかるので、今継続してやっている中から工夫できそうなこと、やり方を少し変えてできそうなことを見つけてみる。既存のものの中から組み合わせを変えるだけで新しいものが生まれることもある。
- また学校における調べ学習や自由研究も改善の余地がある。多くの場合アウトプットが評価されるが、子どもが調べるプロセスが重要である。何をどのように調べたのかを把握し、それが適切・有効であったのかをフィードバックすることで、子どもは自分のプロセスをふり返り、次第にうまくメディアを選択できるようになる。
- そのような経験があれば、何かを調べるときに手軽であるからという理由でインターネットだけを参照しない。また、本や図鑑等を適切に活用できるようにもなる。

### **書き手になることの有効さ**

- 正しい情報を得ているのかという疑問もある。正しい情報を得られるようになる必要があるが、そのためには生徒が受け手ではなく書き手になることが最適な方法ではないか。
- 読書は文章を読むという基礎的な力を身につけるためには必要だと思う。ただ、日本語で自分の考えを表現することが重視されるようになってきているので、書き手になることが望ましい。
- 書く上では本やインターネットを利用する。情報手段として活用するためには、触れる経験を積むしかないと思う。